

## 「霊的戦いの基礎6 戦友が共にいる」

ローマ16章、ダニエル書2章、

遠藤 一則 牧師

序論：

先週はわたしたちが全員、例外なく主の兵士として徴兵され、全員甲種合格、主の最高の兵士として認められているという話をしました。ある人はこう言います。「私なんか、大したこともしていないし、だめでしょう。」聖書は言います。「いいえ、あなたの判断とは関係なく、主はあなたを認めていますよ！」すなわち、あなたも最高の兵士なのです。

しかし、「のろわれるべきです」とパウロが断定した行為は、この神の宣言を否定し、「できる人」と「できない人」というレッテルをはり、そこに律法を例とする人間的基準をあてはめることでした。そこから競争が始まります、そしてそれは際限なく続き、平安と自信を与える福音が、なぜか自己卑下か、謙遜傲慢の道具に変えられてしまうのでした。

もう一度、声を大にして言いましょ。わたしたちは「主によってきよめられている！」のです。

### 1. パウロの場合：

さて、今日はローマの16章、パウロの同労者たちの名前が列挙されています。パウロは主に直接出会い、福音を信じ、それを伝えた異邦人宣教の仕掛け人です。ここに出てくる人のほとんどが実はパウロの働きの実なのです。しかし、それと同時に彼らは一人ひとりパウロの友軍、戦友なのです。戦友とはどんなものか、それについては私は自分の体験からは話せません。従軍経験はないので。しかし、苦楽をともにした、特に苦をともにした仲間だということはわかります。みなさん、そういう友人はいらっしゃいますか。私はここに宣言します。「今ここに集っている ICBC のメンバーは全員、互いに戦友である。」と。しかも自分たちがたとえ互いに親しくなくても、主のからだにおいて互いにつながり、今も進軍しているのです。

### 2. ダニエルの場合

さて旧約にもおなじように戦友たちと主の戦いを戦った人物がいます。ダニエルです。彼の場合、戦友としてシャデラク、メシャク、アベデネゴがいました。バビロンの王ネブカデネザルが夢の解き明かしの件で当時の学者たちをみな処刑するという宣言をはった時、ダニエルは自分ひとりで戦うのではなく、3人に協力をたのみました。祈りを通してでした。彼は「祈ってください。」とみなに頼んだのです。自分の知恵にだけ頼るということはしませんでした。またふりかえって、祈ってもらおうという行為の中にはへりくだりという要素もあると思うのです。戦いには自分だけの力でという、変な高慢さはいらぬということとです。

私たちはどうでしょうか。問題が深刻になればなるほど「祈ってください」というのがむずかしくなります。不思議ですね。でも心配することはありません。次に進みましょう。

### 3. 主イエスの場合

イエスはどうだったでしょうか。もちろんイエスは人として、弟子たちに「祈ってください」と頼みました。神として全知全能の方が、なんと罪人の弟子たちに助けを求めたのです。主はそれほどにへりくだられ、私たちの模範となってくれました。人としてのイエスにとって弟子たちはどんなに未熟な者達であったとしても同労者、戦友でした。そして彼らの成功、失敗にかかわらず、その存在が主にとっては喜び、また頼りになる者とみなされたのではないでしょうか・

#### 4. 主と共に戦うとは

イエスは天に召されて後、父なる神の右の座に着かれました。今は何をしているのでしょうか。「私たちのために祈っている」のです。主が私たちにこう語っておられるようです。「わたしは一人で戦うことができる。一人で勝利することもできる。しかし、この戦いの勝利を私たちに分け与えたい。」このように思っておられるのではないのでしょうか。主はあなたに勝利を共有する者となってほしいと、切に願っておられるのです。

#### 結論：

主はわれわれを戦友としてみてくださっている。そして懇願しておられるようです。「一緒に戦ってくれないか。」何という光栄、何という栄誉でしょうか。ダニエルたち信仰の先輩、ローマ 16 章に見るパウロとともに命をかけた同労者たち。このような人たちと共に戦友として勝利を分かち合うことができるのです。なんという恵みでしょう！主に感謝しましょう。